
神魂村始末記

赤頭蒼介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神魂村始末記

【Nコード】

N1143C

【作者名】

赤頭蒼介

【あらすじ】

峠道で突然事故に巻き込まれた大学時代の友人四人。脱出ルートを探すうちに、現代の隠れ里のような村に迷い込んでしまう。そこは宗教に支配された奇妙な村で、殺人事件を契機に様々な思惑が錯綜し、狂気に満ちたカタストロフへと静かに向かって行く。

第1章 夜の迷走 1

秋の山王峠はキンと張り詰めた冷たい空気で満たされていた。

界限は紅葉の最盛期を迎え、色鮮やかな暖色系で彩られているはずだった。だが、すでに時刻は七時を回っており、眼を凝らしても見えるのはヘッドライトに照らされた僅かな範囲だけである。

「おめえのせいだぞ……」

運転手のケンジがいまいました。そうに毒づいた。当初の予定では関東ではまず見られない美しい東北の紅葉を眺めながらドライブする予定だった。

「えっ、俺？ 俺かよ。そりゃあ、遅刻したのは悪かったけどさ。こっちにだって、いろいろ事情があるわけ……それに、別に俺だけのせいってわけじゃあ……」

ぼそぼそとそこまで言っつてシユウは口をつぐんだ。責任はシユウだけにあるのではない。むしろ、途中で車酔いしたと言っつて、サービスエリアに車を一時間も足留めさせたアマネの責任も大きい。

今回の旅行は大学時代の遊び仲間、深山疾風、合原憲侍、綿貫修、葛西洋太郎、葛西雨音の五人で行く予定だった。アマネと洋太郎は大学時代からの恋人同士で、卒業後すぐに結婚して今では夫婦になっている。

だが、待ち合わせ場所のケンジの父親が経営する自動車修理工場にやってきたオレンジ色のビートルにはアマネ一人しか乗っていないかった。

「洋太郎、なんか急用が入ったみたいでダメになっちゃったの。ほら、仕事柄、接待とかいろいろあるでしょ。でも私は大丈夫。何しろ『三食昼寝付』だから、時間だけはたっぷりあるわけ」

「今時『三食昼寝付』はねーだろ。死語だよ死語」

「家の方、大丈夫か？」

シユウが茶化した後、ハヤトが訊いた言葉に深い意味があったわけではない。

だが、ケンジの自慢のランドクルーザーにそれぞれ荷物を積み込み、出発してからすぐにアマネの様子が普通ではないことに皆気付いていた。

東北自動車道に入ったあたりから、アマネはしきりに気分が悪いと言い始めた。仕方なく佐野サービスエリアに寄り、皆はお茶を飲んだり、買うつもりのない土産物を見たりして時間を潰していたが、アマネはトイレに行くと言ったきり、一向に戻ってこない。ようやく小走りに現れたのは一時間近く過ぎてからだった。

「ゴメ〜ン……奥でちょっと休ませてもらってたの。でも、おかげで元氣回復」

手を合わせながらやってきたアマネは、一見明るそうに振る舞っていたが、顔色は冴えなかった。

実はアマネのいない間、三人は何か洋太郎と揉めて今頃電話でもしているんじゃないかと噂していたのである。実際、アマネの眼は心無しか赤く腫れているようにも見えたが、あえてその話題は誰も切り出さなかった。

その後、日光街道で観光目的の車の渋滞にも巻き込まれ、なんやかやですでに予定時刻を三時間近くも遅れていた。

「今頃はよ……山菜の珍味なんか舌鼓打ちながら、キュツと地酒を引っ掛けていたはずなのによ」

「だから……さ……ま、いいけど。俺のせいでも……」

口を尖らせているシユウにハヤトが、
「ケンジはからかってるだけだよ。ま、それでも民宿で良かったよ。ホテルならまず飯抜きだな」

「連絡は？」

「ああ、サービスエリアから入れといた。八時までに着けば大丈夫らしい。ま、楽勝だろう。急ぐ旅じゃなし、今夜はゆっくり飯喰って、ゆっくり風呂入って、のんびりしようや」

「くーっ。それを思うと腹の虫が黙っちゃいねえぜ」

夜の峠道でランドクルーザーがガウンと吠える。ヘッドライトに切り取られた黄色や赤が、右に左に飛ぶように流れていく。

「張り切るのはいいけど、運転、気を付けてよ」

おう！ と答えて、一瞬ケンジがアマネを振り返ったのと同時に、視界にいきなり黒い物体が飛び込んで来た。

助手席にいたシユウが逸早く気付いて、声にならない叫び声をあげ、腰を浮かす。

黒い物体は急カーブをセンターラインをはみ出して暴走して来たバイクだった。すでに転倒し、赤い火花を吐き出しながら地を這う黒い龍のごとく真直ぐ向かって来る。

「うわっ、このバカ」

ケンジはとっさにハンドルを切って、衝突を回避しようとする。

ランドクルーザーもギャンギャンと悲鳴に似た叫びをあげる。だが、かるうじてコントロールを保っている車体は、さらに横滑りしつつ迫って来る龍の牙からついに逃れられなかった。それは斜めからの軽度な接触だった。だが、バランスを失いつつある車に最後の一撃を与えるには充分だった。

ランドクルーザーはクルクルと回転しながら、ガードレールを飛び越え、漆黒の闇に呑み込まれていった。

第1章 夜の迷走 2

ケンジは眼を覚ました。

初めに脳裏に浮かんだのは、眼前に迫って来る幹や梢である。

あれからどのくらいの時間が過ぎたのか。

周囲には油臭い白い煙がたちこめ、未だに道路を疾走していると
言わんばかりにどこからかカラカラと何かが勢い良く回転する音が
聞こえてくる。……とすると、気を失っていたのはほんの数秒の間
か。

ケンジの位置からは白く光る小さな物がたくさん見えていたが、
やがてそれが星だと言うことに気付いた。視界は再び白い煙に覆わ
れ、強烈なガソリンの臭いが漂ってくる。

ヤバいぜ。

周囲の状況はわからないが、車は激しく回転した後、ケンジのい
る運転席が真上にくるような位置で止まっているらしい。手探りで
助手席をさぐると華奢なシユウの肩のあたりに触れる。その上にす
でに頭は乗ってないのではないか……一瞬そんな恐ろしい考えが浮
かんだが、手探りで顔を探りあてた。

その頬を手の甲で思いきりひっぱたく。

「ひっ」そんな声が出て、シユウが気付いた。と同時に後部座席か
らも「うーん」という声が聞こえてくる。

「ハヤト 大丈夫か？」

「ああ、とりあえず生きてるらしい アマネ！」

「私も大丈夫！……でも、何、このすごい煙」

「オイルだろう。ガソリンも漏れてるらしい」

ケンジはガチャガチャとシートベルトを外しながら、

「このままだとヤバいぞ。アマネ！ おまえの位置が一番下だ！

ドアが開くか調べてくれ」

「うん、わかった」

「どうか、できそうか、皆シートベルト外しとけよ。誰か怪我してないか」

「ダメ！ あっ、でもちよっと待って、少し開いてるみたい、体勢変えて足で蹴ってみる」

「うわーっ。血が出る」

「シユウか。どうした。ひどいのか」

「顔がヌルヌルすると思ったら血まみれだよ。俺、死ぬかも」

「バカっ。人間そんなに簡単に死ぬかよ」

ガンという音が響き、下の方から新鮮な空気が車内に流れ込んで来る。

「やった、開いた」

「アマネ、どうなっている、何かわかるか」

「うん、外が見えた。大きな木に斜めに引っ掛かっている。でも、地面まではたつた一メートルぐらいだから大丈夫」

「じゃあ、順番にそこから外に出るぞ」

がさがさとアマネが車内で体勢を整え、やがて地面に飛びおりる音がする。

「次はハヤト行け」

「おう！ と言いたいが、ちょっと俺は訳ありで動けない」

「何だあ　こんな時にふざけてんじゃねえぞ」

「ふざけちゃいない。実は落ちたシヨックでシユウの座席の下に足を突っ込んで、挟まれちゃったらしい」

「じゃあ、とりあえず、シユウ先に行け」

「俺も動けないよ。頭は痛いし、体も動かないよ」

「どこか痛いのか」

「手足は動くけど、体が思うように動かせないんだよ」

シユウの声は震えている。ケンジは下から入ってきた空気のおかげで、うっすらと見えるようになった視界の中、手探りでシユウの体の周囲を探った。

「この、バカ！ シートベルトしたままじゃねえか。外しとけって

言つたらう」

「えっ。あ、ホントだ。動ける」

「早く行け」

シユウが脱出した後、ケンジはその座席の下に手をつっこんだ。生暖かい棒状のものに触れる。ハヤトの足だ。だが、シャシが変型しているらしく、シートとボディの間になじりと喰わえ込まれている。

「感覚はあるのか？」

「今触つたろ。だけど、動かすのはとても無理そうだ」

「ああ、こいつはシートを外すしか手がなさそうだ」

ケンジの頭の中に、実習で何度も繰り返しかえし行つた車体の解体光景が浮かぶ。だが、視界の悪さと体勢の悪さは想像以上に作業にを困難なものにしていた。

「糞っ。ボールでもなきやとても動かねえぜ」

その時、車外から救いの声が聞こえて来た。

「二人とも、大丈夫。何か手伝えることある？」

「アマネか？ 後ろはどうなっている。工具入れからボールか何か持つて来て欲しいんだが……」

「後ろは滅茶苦茶に潰れてて、荷物も何もかもグチャグチャだわ」

「大きな青い工具箱なんだが……」

「わかつた、とにかく探してみる」

アマネの声がそう答えてからすぐに、ボンネットの方からパチパチという妙な音がし始めた。

「何だ、あれは？」

「電装関係の音だ、いずれにしてもいい音じゃない。早くここを出なくちゃまずいって合図だ」

ハヤトの質問にケンジが答える。ほどなくアマネの声が聞こえる。「青い箱あつたよ。五メートルぐらい向こうに飛ばされてた。ボールつてこの鉄の棒みたいな奴でしょ。今、持つてくから待つてて」

アマネが木を足場にして車体に足をかけた途端、ボンネットのあ

たりでボンと大きな音がして、車が大きく動いた。不安定な体勢だったアマネは外に弾き飛ばされ、ケンジも車の天井に嫌というほど頭を強打する。

「アマネ、大丈夫か」

「うん、大丈夫。今、行く」

ハヤトの質問に遠くからアマネの元気な声が聞こえて来る。

「わかった。但し、ボールだけ置いてけ。幸い上半身は動けるから、俺がケンジに手渡しする」

アマネは言われた通り、木に足をかけ、体をいっぱい伸ばしてボールをハヤトに手渡しする。足を固定されたままの不自由な状態で、上半身を捻りそれをケンジに渡そうとした時、ハヤトの眼に飛び込んで来たのは猛り狂う炎だった。ボンネットあたりから吹き出した炎を背に、険しい顔をしたケンジの姿はあたかも不動明王のようである。

「ケンジ、やばいぞ！ 火が回り始めた。俺はいいからすぐ逃げる。二人とも焼け死ぬぞ」

「バカタレ！ 車のことは専門家にまかせんかい。まだまだ、エンジンルーム。下に回るまで、まだ少し余裕がある」

そう言いながらボールを引ったくり、シートの下の乱暴に押し込む。ケンジが力を入れると、シートはメリメリと持ち上がり、ハヤトの足の拘束は嘘のように解かれた。

「抜けたぞ！」 「飛び下りろ！」

グチャグチャになった車内からどう外に出たものか。気付いた時は二人で折り重なるように、地面に転がり、そのまま頭を低くして全力で駆け出した途端、車はゴウという音と共に炎に包まれた。

黒煙は高々と舞い上がり、やがて漆黒の夜空に吸い込まれていった。

第1章 夜の迷走 3

乾いた枝を何本かくべると、勢いをなくした炎は再び新たな生命を注ぎ込まれたように燃え始める。

周囲は深い森である。何も無いが、枯れ枝だけは売る程ある。

四人は炎を見詰めて眠りもせず、じっと座り込んでいた。眠らないというより、むしろ眠れないという方が正しい表現かも知れない。

十月の山王峠は体の芯まで凍えるほど寒かった。たまたまシユウのポケットの中に百円ライターが入っていたから火をおこせ、こうして暖をとることが出来たものの、そうでなければ全員凍え死んでいたかもしれない。

「悪いな……」

ケンジがぼそりと言った。

「俺の運転のせいだよ……」

「ケンジのせいじゃないよ。やっぱ、俺が遅刻したのが悪いんだよ。遅刻したせいで、渋滞にも巻き込まれちゃったしさ。こんな時間じゃなけりゃ、あんなバカみたいなローリング族も走ってないだろうし……」

シユウが焚き火に枯れ枝をくべる。

「違うわ……私のせいだと思う。みんな、ごめん私……」

「ま、反省会はまたの機会にしてさ……」

ハヤトはアマネの話を遮り、

「これからのことを考えなくちゃ。ヘタしたら、俺たち死ぬぜ」

ハヤトの言葉にアマネは小さく頷いた。

「とりあえず、警察に連絡だな。ケータイでもあればいいんだが……」

……

「俺、持ってるぜ」

ケンジはポケットから携帯電話を取り出しながら、

「でも、残念ながら圏外だ。さつきから何度も試してみたが、ダメだ」

「じゃあ、連絡の取りようがないってこと？ でもさ、あれだけ派手に車が燃えたんだし、そのうち家族も何か気付いてくれるだろうし、ここでこうして待ってれば、捜索隊とか来るんじゃないの？」

シユウの言葉に皆が押し黙ったのは、それがいかに難しいかを、事態を口に出す事によって逆に改めて思い知らされたからだだった。

旅行は四泊五日の予定だったが、予約した宿は何か連絡してくるだろうか。宿の手配はハヤトの担当で、連絡先は携帯電話にしてある。だが、今それは黒焦げになったランドクルーザーの残骸の中にあり、たとえ使えたにしても圏外ではどうにもならない。

ハヤトは妻の鈴々りじあと、今年三歳になる長女の風花ふうかの顔を思い浮かべた。夫婦仲はいい方だが、共働きということもあって、互いの生活にはあまり干渉しない暗黙のルールが出来ている。行方不明になっていることに気付くのは帰宅の予定日を過ぎてからだろう。アマネの事情はわからないが、アパート暮しのケンジや親と同居しているシユウにしても、同じような状況だろう。実際に警察が動いてくれるまで、へたをしたら一週間ぐらいかかるかも知れない。

この事故に気付いてくれた者がいただろうか？ たとえばたまたま山王峠を走っていた車が、遠くの炎を見つけられるとか……。だが、峠に入ってからすれ違ったのは事故を起こしたバイク一台だけである。おまけにつづら折りになった峠道は、鬱蒼とした自然に包まれ、民家の一軒も見当たらない上、見通しもひどく悪い。

とりあえず朝まで待ってから、人のいる場所まで移動するしかないだろう……とハヤトは考えた。

「お前、足の方はどうだ、少しは歩けるか？」

ケンジも同じ事を考えていたらしく、ハヤトに訊いた。

「ああ、おそらく大丈夫だ。道さえ良ければ問題ないんだが……」

ケンジが一瞬険しい顔をしたのは、車がどこをどう転げ落ちたかは不明だが、転落経路を逆に登攀するようなことを考えているから

だろう。ハヤトもこの足で険しい山道を登れる自信はなかった。皆には内緒にしているが、シートに挟まれた右の足首がズボンの中でパンパンに腫れあがっていた。

「シュウ君は大丈夫なの？」

アマネが訊くと、ケンジは一旦シュウの頭を小突いてから、前髪を乱暴にかきあげてみせた。額に五センチ程の浅い切り傷がある。

「こいつはオーバーなんだよ。いつものことだけだな。それよりお前は？」

「うん、車から落ちた時、ちょっと腕を痛めたみたい。捻るとちょっと傷むけど、骨には異常がなさそうだから、大丈夫よ」

「そうか……」

ケンジは腕を組んでしばらくの間、眼をつむっていたが、

「とりあえず、この暗闇で動き回っても意味がないし、少し寝ようや。体力温存のためにね。火の番は男三人で交代にやろう。少しでも寝ておかないと、明日もたないぞ」

「じゃあ、俺、ちょっと……」

ハヤトが立ち上がるうとするのを制して、

「ん？ どこに行くんだ？」

「だって、もつと枯れ枝が必要だよ」

「それもそうだな。でも、ハヤトは足痛めてるから、少しそこで休んでろよ。シュウ、代わりに行ってくれるか」

「ああ、いいよ。何なりと言ってチョーダイ！」

「俺は最初の火の番をやってる。あんまり遠く行くなよ」

ケンジの声を背中に聞きながらシュウは小走りに駆け出した。灯りの一つもない深夜の森をこうして走っている自分の姿が何だか妙に感じた。

退屈でゴミゴミとした東京の生活。そんな生活から一時でも解放されたいと期待して参加した旅行が、途中でこんなことになるなんて……。そう考えると人生でうまくいったことなんか、一度もなかった……。そんな風にさえ思えてくる。

足許でメキメキと木が裂ける音がする。そうそう、枝を集めてくるんだ。暗闇に包まれてあたりはよく見えなかったが、枯れ枝を探すのは簡単だった。大袈裟に言えば、枯れ枝の絨毯の上を歩いているようなものだ。

確かに事態は最悪だが、考え用によつてはさほどひどいわけじゃない。何よりあのひどい事故にもかかわらず、大怪我を負った者がいなかった。それに、信頼できる仲間がいる。誰よりも頼りになるケンジがいるし、頭の切れるハヤトもいる。アマネは皆に癒しを与えるナイチンゲールのような存在だ。

仲間さえいれば。

そう考えた時、シユウは急に不安に襲われた。何も考えずに闇雲に枝を拾い集めていたが、皆のいるところから随分遠くに来てしまったような気がした。帰り道がわかるだろうか……。

慌てて振向くと、たき火を囲む三人の姿が見えた。思ったよりずっと近い位置で、三人の表情さえわかる。

ほっとして再び前方に眼を向けた時、何か黒い人影のようなものが前方の木々の間をよぎったような気がした。

まさか。

ごしごしとメガネをこすり、眼を凝らしたが、そこには唯闇が広がっているだけだった。

どこからか寂し気なフクロウの啼き声が聞こえた。

第1章 夜の迷走 4

翌朝、冷気は衿や袖の僅かな隙間を探りあてて、液体のように服の中に忍び込んできた。

シユウは思わず身震いし、自分のその動きで眼を覚ました。

「あつ！ ヤベ……」

慌てて焚き火に枝をくべる。よく乾燥している枝はパツと燃え上がり、パチパチと火の粉が舞い上がる。

ケンジとアマネは木の幹にもたれてよく寝ていた。アマネが肩に羽織っているのはハヤトのジャケットだ。

「起きたか」

そのハヤトが木の枝をステッキ代わりに、足を引きずりながらやつてきた。

「足の方はどうよ？」

「ま、ごらんの通りだ。とりあえず人の肩は借りないで済みそうだがそれより、ついでにあたりの様子も見て来たんだが、なかなかやつかないことになるかも知れん」

「つーことは？」

「うん、向こうは垂直に切り立ったような崖で、道路も何も見えな
い状態だ」

「陸の孤島？」

「ま、最悪そうなるかも。もう少し調べる必要があるけど……」

ケンジが野獣のような欠伸をしながら、眼を覚ました。

「どうした、朝飯はまだか……何？ 陸の孤島だった？」

「ああ、車の周囲を見ただけだが、とても登れるような崖じゃないぞ」

「そうか、少し対策を練らなくちゃダメだな」

アマネが眼を覚ますのを待ってから、これからの行動について話し合った。

とにかく、元の道路に戻れないことには話にならないので、ケンジとシユウは崖沿いに歩いて、登攀ルートを探すことにする。その間、アマネと足の悪いハヤトは車の残骸から食料や使えそうなものを探したり、逆に崖の反対側に下って水を確保できる沢などがないか探索する。

「で、朝飯はどこに喰いに行く？」

ケンジがジョークを飛ばすと、アマネが皆の手に小さな包みを渡した。それは小さなキャンディーで、朝食と呼ぶにはあまりにもお粗末だったが、その甘さは皆の心に沁みだ。

ケンジたちが出発した後、ハヤトとアマネは転落した場所へと向かった。

朝の光は悪夢のような現実をすべてさらけだしていた。昨日は見えなかった周囲の様子が陽光の中に煌めいている。

「きれいな所ね……」

「確かに……」

ハヤトは苦笑いをしながら答えた。目の前には垂直に切り立った崖がそそり立ち、その岩場に根をおろして赤や黄に葉を染めた木々が斜めに生えている。まるで巨大な花の滝に対峙しているような美しい眺めだ。

所々枝が折れたように見えるのは、昨日ランドクルーザーが落下した痕に違いない。枝が落下の速度を弱めたから助かったようなものの、そうでなければそのまま地面に激突して、車ごと紙屑のようになくしゃくしゃになっていたに違いない。

そのランドクルーザーは崖の下の大きな二本の木の間に挟まれるように斜めになっていた。火は消えているがまだどこかで燻っているらしく、細く白い煙りが立ちのぼっている。火力は相当なものだっただけで、その二本を始め周囲の木々は、車を中心に黒焦げになっている。

いぶり臭いにおいがあたりをたちこめている。

「めばしい物はないかも知れんな」

そう言いながら車内を探ってみたが、ほとんどが炭の状態で、まともなものは何一つないようだった。それでもアマネが記憶を頼りに燃え残りの荷物の一番奥から、丸いビスケットの缶をようやく掘り出した。

「サービスエリアで買ったの。まさかこんなところで役にたつとは思わなかったけど……」

飲み物類は車外に飛び出した缶ジュースが三本だけで、車内にあつたものはすべて破裂している。他に役にたちそうなものといえば青い工具箱ぐらいだ。

「寂しい限りの収穫だな……」

二人は一旦焚き火の場所に戻って、拾ったものを置いてから、工具箱にあつたビニール袋を持って反対方向に歩き始めた。食料はともかく、ジュース三本では飲料水として一日ももたない。あまり考えたくはなかったが、ケンジたちの方がうまくいかなかったら、じつと救出を待つことになるかもしれない。その時のために、最低でも水場の確保は必要だった。

鬱蒼と茂った森を抜けると、唐突に岩混じりの斜面に出、そこを下ってさらにしばらく行くと背の低い灌木や雑草に囲まれた湿地帯に出た。

湿地帯を迂回しながら少し歩くと、岩場からチヨロチヨロと水が流れ出している場所を発見した。

二人で顔を見合わせ、初めにアマネが両手に汲んで口へと運ぶ。

「おいしい」

アマネは現在の境遇も忘れて、満面の笑みを浮かべた。

それは今回の旅行でハヤトが見たアマネの初めての笑顔だった。

「じゃ、俺もひとつ……」

身を乗り出して水を受けようとした手をアマネがつかんだ。

「ん？ どうした……」

「ね、聞こえない？ あの音……」

耳を凝らすと、かまびすしい鳥の啼き声に混じって、何か一定の

うなりのような音がかすかに聞こえる。

しかもそれは次第に大きくなりつつあった。

「こつちだ」

杖代わりに持っていた木を投げ捨てる、足の痛みも忘れて水が流れ出している岩を、草を手がかりにマシラのようにしゃにむによじ登る。上はとことどころに灌木の生い茂る広い原っぱだった。音はさらに大きくなり、姿は見えないが今でははっきりと何かのエンジン音だとわかる。

アマネが息を切らして後からやってくる。だが、エンジン音は逆に小さくなり始め、また元のようになりとなり、やがて森の喧噪に溶け込んでいった。

「車だ……いや、バイクかな……」

「こんな山奥に？」

「不思議だけど、この先に林業か何かで使う道でもあるんだろう。いずれにしても、車かバイクが通れる道があることは確かだ。それは間違いなくどこかで大通りに繋がっている」

「さっきの音は今も誰かがその道を通っている証拠だわ」

「ちよつと行ってみようか？」

ハヤトは原っぱを覆いつくす丈の高い草を両手でかき分けながら、
「でも……不思議だ。林業？」

自分が口にした言葉に首を捻った。

第1章 夜の迷走 5

夕方、ケンジたちが疲れ果てて帰って来た。

「よう、お疲れ」ハヤトは肩を叩いて出迎えながら、

「で、ちよつと聞きたいが、まさか全部喰っちゃいないよな」

「ん？ 何だ？」

ケンジがちよつとむっとしたような顔を向ける。

「あれがすべて……はつきり言つて。俺たちだつてまだ一個も口に
してないんだぜ」

「何の話だ？」

「本当に知らないのか……」

ケンジが首を捻っているのを見て、アマネが説明する。

「ここに車から取ってきたビスケットとジュースを置いといたのよ。
帰つて来た時なかったから、てつきり一旦戻つた時に、持っていっ
たんじゃないかって……」

「バカ言つな。俺達は今初めて帰つたところだ」

「そうか、すまん……しかし、そうだとすると一体誰が……」

ハヤトは首を捻り、シユウは何か言いかけたが口を閉じた。

目の前にそそり立つ崖のせいで、すでにあたりは薄暗く、気温も
かなり下がっていた。

火を囲んで暖をとりながら互いの成果を報告しあふ。本来ならジ
ユースとビスケットが憤ましい俄かキャンプのテーブルに並ぶはず
だったが、青いビニール袋に汲んで来た湧き水しか口にするものは
なかった。

「畜生、腹減つたなあ」

シユウがやけくそ気味に仰向けに寝転がる。その気持ちは他の者
も痛い程わかった。

ケンジとシユウは危険を犯し、唯一とも思われるルートを探し出
し一時間ほどかけて登ってみたが、崖の上にはさらに巨大な崖が立

ちはだかっているだけだった。そこからは四方がよく見渡せた。だが、上下左右どの方向にも道らしきものは見当たらなかった。わかっただのはランドクルーザーは梢をなぎ倒しながら相当長い距離を落下、あるいは滑り落ちたということだけだった。

「そっちが見つけたっていう道は大丈夫どうなんだよ」
ケンジが訊く。

「ああ、とにかく道だということは確かだ。車一台がようやく通れるほどで、道の真ん中がちょっと盛り上がってて、草が生えてる感じの……」

「つまり、現在使われている道だな。とりあえず明日はそっちに行ってみるか」

ケンジの提案に反対する者は誰もいなかった。

峠道に戻る方法がなく、ここで何日間も水だけを飲んで、いつ来るとも知れぬ救援隊を待つぐらいなら、たとえ僅かな可能性でもそれに賭けて行動をおこした方がいい。選択肢はないのだった。

第1章 夜の迷走 6

その夜、いつものように交代で火の番をしている時、ハヤトはミシミシという足音を聞いたような気がした。人が歩く時に小枝を踏み折る音だ。

ついうたた寝をしたことを反省しつつ、急いで枝を火にくべようとして、ふと遠くにちらちらと蠢く光を発見した。人魂……一瞬、そんな考えが浮かんだが、すぐに取り消した。他の者は皆すやすやと眠っている。

「おい……」

「あー？ 何だあ？」

肩を揺ると、ケンジは不機嫌そうに眼をこすった。

「あれ、何だと思う？」

光の方を指差すと、ケンジは自分の頬に一発平手打ちをして目を覚ましてから、

「ありや松明みたいなもんだな。松明にしちやちとお粗末だが、こんな夜更けの山奥になんで人がいるんだよ」

さすがに現実主義者だけあって、超自然現象などとは夢にも思わないらしい。

「とにかくつけてみようぜ。いざっていう時は、俺がダツシュするから、お前は後ろから来てくれ」

二人はそつと焚き火のそばから離れ、謎の光の跡を追った。光は右に左にゆれながら、森を抜け、灌木に覆われた斜面を登って、ある方向を目指して進んでいく。二人は闇に紛れているのをいいことになりそばまで接近し、相手の正体を確かめようとした。

光が揺れるたびに黒っぽい服を着た小柄なシルエツトが木々の間に浮かび上がる。

大きな木を回り込んだところで光が急に小さくなった。

相手を見失うまいと、ケンジは静かにダツシュをしたが、すぐに

近くの幹に身を隠し、ハヤトにもそのあたりに隠れるよう手で合図を送った。

そこは四方を木で囲まれた小さな草地だった。二人はその木の陰から中の様子を伺っている。

シルエツトが身をかがめて何かをしていたと思う間もなく、メラメラと炎が立ち上がり、あたりが急に明るくなった。黒いバイクスーツに、頭はオレンジ色の稲妻マークのついた黒いヘルメットを被っている。横に置いてあるのはいぶされて黒光りしているビスケツトとジューズの缶だ。

ハヤトが俺たちから盗んだ缶だ……と指差すと、ケンジはわかっていると言わんばかりに指で丸を作り、続いて俺にまかせると自分の胸を叩いて見せた。相手は石の上に腰をおろし、ビスケツトの缶を開け始めた。

無防備に背中を向けている相手に、ケンジは忍び足で歩み寄りいきなり飛びついた。首に太い腕を回して締め上げる。だが、相手も俊敏だった。とっさにスルリと体を落として逃れると、豹のような素早さで闇に紛れ込もうとする。

相手にとって不幸だったのは目指した方角に偶然ハヤトがいたことだった。しかもこん棒という武器を携帯している。実際は単なる杖に過ぎないのだが、瞬時に踵を返して、ケンジに体当たりをした。武器を持っていない方が組し易しと見たのだから、一度逃がした相手を二度も取り逃がすケンジではなかった。

あっさり手首を捻りあげて横倒しにすると、背後からがっしりと押さえ付けた。

そして、次の瞬間「あっ」と叫んで立ち上がった。黒いヘルメットが脱げた拍子に、サラリと金色の長い髪があふれ出して来たのだった。相手にもう抵抗する力は残ってなかった。

ケンジとハヤトは女を見おろしながら呆然と立ちすくんでいた。

第1章 夜の迷走 7

周囲のイルミネーションが流体のように長く尾を引いて、次々と後方に飛び去っていく。

桜木瑪留、通称メルは自慢の金髪のロングヘアを黒いヘルメットの中にたくしこんで、東京郊外のバイパスをバイクで疾走していた。夜明けも近いこの時刻、さすがに車の姿はほとんど見えない。

やがて市の中心部から側道に入り、しばらく行くと周囲は田園地帯になる。そして、さらに走るとあたかも海原にぼつかりと浮き出た島のように、そこだけに文明のエキスを凝縮したような広大な商業地帯が現れる。

メルはそのひとつの建物の脇道に入ると、回り込むようにPの文字がある方向に進んだ。

そこは近頃流行りの総合アミューズメントビルだったが、営業は深夜二時まで、当然明け方のこの時刻にはパーキングは閉鎖され、入口は頑丈な鉄の鎖で塞がれているはずだった。だが、今や鎖は解かれ、メルは当然のごとく屋上にあるパーキングに向かって傾斜のきつい誘導路をバイクを駆っていく。

一旦屋上に出、百八十度ターンをして周囲を見渡す。ただっ広い屋上はしんと静まり返っている。やがて、真っ暗な建物の陰からチカチカと明滅する合図のライトが見えた。

バイクでゆっくりその方角に近付くと、数人の男達がたむろしているのが見えた。

メルはエンジンを切ってバイクを降り、ヘルメットを脱ぐ。夜目にもあざやかな金色の髪が夜風になびく。

「おめえ、一人か？」

髪をツンツン尖らせた目つきの怪しい男が訊く。肩には十字のタトゥーが彫り込んであり、手で何かをカチャカチャと弄んでいる。おそらくバタフライナイフか何かだろう。

「勇気あんな……」

「そんなことより、妙子は無事なんだろうね」

男はニヤリと口の端を歪め、後の男たちに合図をする。男の手下らしい二人が、背後の鉄の扉を開いて建物の中へと入り、暫くして後ろ手に縛られた女を連れて来た。

涙と殴られたらしい痕跡で、顔はぐちゃぐちゃになっている。

「メル……ごめん……」

「いいんだよ、それより、あんた大丈夫？」

妙子は悔しそうに腫れた唇を噛み締めた。それだけでメルには何があったのか想像することが出来た。

「とりあえず、キー預かるところか……」

男は相変わらずニヤニヤとしながら、

「この女と交換だ。二人してバツクレられちゃかなわんからな」

「わかった」

手下の一人が妙子の紐をほどいて近付いて来る。メルは妙子の腕をつかみ、代わりにその男にバイクのキーを投げて渡した。妙子の背中を優しく撫でながら、

「これで、タクシーでも拾って、先に帰ってな」

数枚の千円札と携帯電話を握らせ、そのまま背中を押す。妙子は

一旦立ち止まって、何かを言いかけたが、メルに目で促されると、

一目散に駆けていった。

「さてと……」

男がパンと手を打ち鳴らした。

「盗んだ例のものを返してもらおうか」

メルはバイクスーツのジッパーを少しさげ、胸許から白い粉の入った小さな袋を取り出した。だが、男が近付いて来て手をさしだすと、いきなり引っ込めそのまま親指を深く袋にめり込ませた。ぐるぐる振り回すと、中の粉が面白いようにサラサラと流れ出し、中空に飛散する。

「あっ、てっ、てめえ、何やってんのかわかってんのか？」

だが、メルは無表情のまま粉をまき散らし続けた。

「約束を破ると、どういう目にあうか知らねーわけじゃねえだろな」

「最初に約束を破ったのはそっちだろ」

「何？」

「妙子には一切手出しをしないって約束だよ。忘れたとは言わせないよ。どうせ、ヤクを渡した後だって、アタシをすんなり解放するつもりなんか微塵もないんだろう」

「この、アマ、嘗めやがって」

男はバタフライナイフを構え、後ろの三人の男に合図を送った。

男達はメルの退路を断つかのように左右に散り周囲を囲んだ。

「鬺りもんにしてやるぜ！」

男が赤い舌を出して、ナイフの刃先をペロリと嘗める。メルは次第に後ずさり、バイクを背にすると、マフラーのあたりに隠してあった鉄パイプを取り出して構えた。

男たちはそれぞれに手にした得物をクルクル回したり、カチャカチャいわせたりして、じりじりと距離を縮めてくる。その唇は陰惨な笑いをこらえきれずに醜く歪んでいる。

やがて、横にいた太つちよの男がチェーンを振り回しながら突進しようとした時、それまで建物の陰にいた男がいきなり姿を現した。「ねえちゃん、いい度胸してんな」

メルはぞつとした。その男の存在に今まで全く気付かなかったのだ。だが、ぞつとしたのはそのせいだけではない。今までに数限りなく会って来たどんなワルにもない、危険な気配を感じたからである。

チェーンを持った男はたたらを踏んでから、慌てて後ずさった。

「あつ、桐生さん。すみません　この女にはきっちりケジメとらせますから」

バタフライナイフの男が言う。ニヤニヤ笑いはすっかり陰を潜め、むしろ怯えた表情になっている。

「別にいいよ、あんな薬の一個や二個。何だか面白くねえから、も

う止めようや」

「いや、そっちが良くて、こっちにもメンツうちゅうもんがありますから」

「何だと」

桐生と呼ばれた男が前に出て来た。柄物のシャツに黒いスーツ姿が、細いが鉄の芯を鑄込んだような硬質な肉体によく似合っている。すっとポケットに手を入れ、煙草を取り出した。

「ツヨシ。今の言葉もう一回言ってみろよ。……ん？」

「あつ。いや、す、すんません……」

男達が一斉に包囲の輪を解いて、桐生の顔色を伺っている。

「失せる……」

「へっ？」

先程までバタフライナイフを振り回して粹がっていたツヨシは真つ青になり、額に汗が流れている。

「ちとこの女に話があるから、おまえら失せろって言ってんだよ」

「あつ？　そういう事で……」

ツヨシは追従笑いを浮かべてから、桐生に挨拶をし、他の連中と一緒に建物の裏側に姿を消した。ほどなく一台の車と二台のバイクがその方角から飛び出し、ガラガラの駐車場を斜めに突っ切り、けたたましいエンジン音を響かせながら誘導路へと消えていった。

「どういふ魂胆だか知らないけど、あたしは何でも黙って言いなりになるような手緩い女じゃないからね」

メルは改めて鉄パイプを握り直した。

「知ってるよ、メル……久しぶりだな」

桐生はニヤリと笑った。

「俺だよ。……と言ってもわからんだろうな。カズと言えば思い出すか」

「カズ？　あのカズ兄ちゃん？」

「ああ、そつだ」

メルの脳裏に子ども時代の思い出が一気に沸き起る。

スポーツ万能、勉強はトップクラス、しかも人望が厚くいつも大勢の仲間に取り囲まれ、慕われていたカズ兄ちゃん。困っている時、いつも黙って手をさしのべてくれたカズ兄ちゃん。

それがどうしてこんな世界に。

「まあ、俺もいろいろあつてな……」

まるでメルof気持ちを見透かしたように、指に挟んでいた煙草に火を付けると、

「ところで、ちょうどよかった。これも何かの縁だろう。ちょっとばかり手伝ってもらいたいことがあるんだが……何、ちょっとした儲け話さ。もちろんお前にもわけまえはたっぷりやる」

「まさか、ヤクの売人？」

「つまんねえよ、そんなハナクソみてえな話。ま、今詳しく言うことはできねえが、ざっと十億の大口だ」

メルは桐生の目の奥に、一瞬冷たい光がよぎったのを見た気がした。

第1章 夜の迷走 8

それから約十四時間後、二人は漆黒のドウカティ・モンスターに跨がり、山王峠を疾走していた

アップダウンの激しい峠は先程からずっと下りばかりが続いている。すでに日は落ち、美しく紅葉した景色は墨で塗りつぶしたように暗い。

桐生はバイクを止め、ポケットから一枚のメモを取り出すと、ペンライトで照らし出した。

「道、間違えたんじゃない？」

「間違えるも何も、一本道だから間違えようがねえのさ。唯、脇道がみつからねえ」

「もどる？」

「いや、もう少し走ると土産物屋がある。そこで情報を仕入れよう」
二人は再びバイクに跨がり、下り坂を後輪をスリップさせながら猛スピードで駆けおりる。

ほどなく前方に三角形の看板が現われ、土産物などを売っている「道の駅」が表れた。まだ、閉店前だったが、駐車場はガラガラで客はぜんぜん入っていないらしく、すでに片付けが始まっていた。

桐生はバイクから飛び下りると、一旦店の中に入って、しばらくしてから年輩の女性と現れ、軽トラに農産物を積み込んでいた老人のところに行つた。年輩の女性は店に戻り、今度は老人と何事か話し込んでいたが、首を振りながら戻つて来た。

「まるで、雲を掴むような話だぜ。とにかく情報はゼロ」

「地図でも貸してもらつたら？」

「地図に出ているような場所なら、こんなに苦労はしねえさ」

ニヤリと笑いを浮かべた。

「出でないの？」

「ああ、もしかやと思ってあのジジイに訊いてみたが、そんな村は生

まれてこのかた聞いた事がないそうだ」

「それって、どういう場所？」

だが、それには答えず、桐生は思いきりアクセルをふかすと、今下って来た道を猛スピードで登り始めた。いつ果てるともなく続くつづら折りの道を、コーナーをギリギリに責めながら、駆け登る。

「ねえ」

メルは桐生のヘルメットに口をつけて、大声で話しかけた。

「見つからなかったらどうする」

「絶対に見つけるんだよ、今日中に」

桐生も大声で吼えた。その声は決意というより命令に近く、メルはそれ以上何も訊くことが出来なかった。

漆黒のバイクは漆黒の闇をヘッドライトで裂きながら、次々と現れるコーナーを攻めていく。やがて道は峠を越えたらしく、今度は次第に下り坂が増えてくる。

桐生が何かを言った。

「えっ？」

メルが聞き直し、桐生が後ろを振り向いた瞬間、前方のコーナーが向こうから来るらしい車のヘッドライトで、燃えあがるように明るくなった。

「危ない」

桐生は振返り中央分離帯付近を走っていたバイクをとっさに山側に寄せようとした。いつもなら強引なハンドリングにも応えてくれるドウカティだったが、今日は事情が違った。二人乗りの不安定な体勢はあつという間に黒い巨体をコントローल不能にし、慌てて力ウンターをあてようとしたものの、そのまま転倒して、ギヤギヤと耳障りな音を発しながら、ガードレールに向かって横滑りしていった。それと同時に、光の帯を追いかけるように、ランドクルーザーの巨体が表れる。

二つの巨体は共に相手に一撃を加え、それぞれに奈落の断崖を落ちていった。

メルはどこからか聞こえてくる悲鳴が、落下しつつある自分の咽から絞り出されたものだということに気付いた。それは長く長く尾を引き、漆黒の空に吸い込まれていった。

第1章 夜の迷走 9

朝から空はどんよりと曇っていた。

皆、車の中にいたままの軽装なので、寒さが一層身にしみる。

だが、メルから奪い返したジュースとビスケットのおかげで、それぞれに少しは幸福な気持ちを味わっていた。

「ちょっと、少ないかも知らんが、朝はここまでにしておこう、今後何があるかわからないからな」

「えっ。一人二枚ずつってこと。それ、ちょっと淋しくない？ せめて、あと一枚」

「いや、ダメだ」

ケンジはシユウウの願いを一蹴してから、

「おい、お前喰わないのか？」

メルに訊いた。メルは大きな葉っぱに乘せられたビスケットに見向きもせず、じっと膝を抱え込んでいる。

さすがに一緒にいた男とはぐれたので意気消沈しているのだろうと、ケンジは解釈した。事によったら、と言うよりかなりの確率でその男はすでに死んでいるかもしれないのだ。

気付いた時、幸運にもメルは木の枝にひっかかって気を失っていたらしい。男やバイクを探して歩きまわっているうちに焚き火の灯りをみつけ、男だと思って近付いたら事故の相手らしいので、何をされるかと恐ろしくなつて様子を伺っていたそうだ。

空腹に耐えかねて食料を盗み、寒さに耐えかねて火を盗んだのだが、少しも悪びれた様子がなく、謝りもしないのは礼儀知らずに思えたが、それが現代の若者気質なのかもしれない。

大人っぽく肉感的なので二十代半ばに見えるが、まだ十代だといつので驚いた。

「とにかく、こうなってしまったからには、皆で助け合うしかない。当然、お前も一緒に来いよ」

メルはケンジの命令に何も答えなかったが、反論もしなかった。

朝食を済ませた後、それぞれに荷物とも言えないわびしい携帯品をまとめ、すぐに出発した。焦っても仕方がないとわかっていたが、何よりも空模様が心配だった。

持ち物は最小限に押さえるようにした。メルが食料品関係、他は工具箱から何か役立ちそうなものを一つずつ選び、水筒代わりのビール袋は全員が一枚ずつ持つ事にした。

ハヤトとアマネの道案内で森から岩混じりの斜面を過ぎ、そこを下ったところにある湿地帯の奥で一旦水を補給し、さらにその水場の横の岩をよじ登って草原へと出る。

「ここから、あの山の方角目指して五十メートルほど行ったところに、道があったというわけだ」

ハヤトが遥かに見える山を指差して言う。

丈の高い草をかき分けながら進むうちに、どこからか雷鳴が轟いてきた。

「なんだか、雲行き怪しいんじゃないの。雨降ったら、ヤバいだろ？」

「そりゃあ、傘持ってないんだから、濡れるな」

シユウの不安をハヤトが茶化す。

「いや、ホント、そういう問題じゃなくさ、俺達、行き倒れかなんかになっちゃうんじゃないの」

シユウは不安そうに空を見あげながら、メガネの奥で目をしばたかせた。

しばらく進むと、予定通り未舗装の狭い道に出た。そこでしばらく休憩をとることにする。

「昨日、ハヤト君とも話しあっていたんだけど、この道って何の道かしら？」

アマネがビール袋の水を飲みながら、ケンジに話しかける。

「さあて、地図が燃えちまったからなんとも言えないけど、山奥のこんな場所で道に出くわすなんて、全く宝くじに当たったようなも

んだな」

「でも、ここにある道は幻じゃないわよ。それとも、皆で同じ夢見てる？」

「まさか……ただ一つ言えるのは、この道は俺達に残された唯一の希望の道と言っわけだ。とりあえずこれを辿るしかないだろう」

「どつちに？」

アマネの質問にすぐには答えず、ケンジは道の左右に目をやった。右も左も同じようにカーブして同じように草の海に埋没している。

「なかなか難しい問題だ」

「俺なら、とりあえず左に行ってみるな……」

ハヤトが話に割り込んで来た。

「確かなことは言えないけど、右の方は山に向かってている。人里に出るつもりなら、なるべく山から離れた方がいい」

アマネは左右に目をやり、それから空を見上げた、鉄色の雲に覆われた空の一面が一瞬明るくなり、しばらくしてからゴロゴロと雷鳴が轟く。

その時、道にしゃがみ込んでいたメルが声をあげた。

「ドウカティだ」

「何だつて？」

そばにしゃがみ込んでいたシユウがそばに歩み寄る。

「ドウカティ……カズ兄のバイクだよ、タイヤの痕が残ってる」

「まさか、そんなこと分かんのかよ」

「道の状態さえ良ければな」

ケンジたちもやってくる。

「ほら、この痕、これは間違いないく兄貴のバイクだよ。ここでちょっとスリップして向こうに行ってる」

多くのタイヤ痕が残る中に、一本くつきりと残されたタイヤ痕を指差しながら説明する。

「そついえば、お前確か村があるって言ってたよな」

「カズ兄がそんなこと言ってたよな気がするけど……誰かと逢う

つもりだった事は確かだよ。何度もこんなところで野宿できるか、早く逢わなきゃって言ってたからね」

「村？ バカ言っちゃいけないよ。こんな山奥に村なんかあるもんか」

シユウがあきれたように手を広げる。

「村か……なんとなく聞き逃していたけど、本当にあるのかも知れんな」

「おいおい、ハヤト、おまえどっちの味方だよ。とにかく早く町まで降りようぜ」

「いや、こつちに行けば町に行けるとい保証はないんだ。あくまでも可能性の問題だよ。新しいファクターが出て来たら、可能性も変わるのさ。俺はこの轍を追って行くべきだと思う」

「そうだな、俺も賛成だ」

ケンジが立ち上がりながら、手にしていた土塊を投げ捨てる。

「おいおい、ケンジまで……アマネ、おまえは？」

シユウはアマネに救いを求めたが、アマネは残念そうに首を横に振っただけだった。

再び空の一面が光り、ゴロゴロと雷鳴が轟いた。

第2章 奇妙な村 1

厚い雲に覆われてはつきりとはわからないが、時刻はとうに正午を回っているはずだった。

疲労と空腹感が一層神経を逆撫でする。

「本当にこの道で大丈夫なのかよ？」

シュウの泣き言に誰も反応しなかった。シュウも答を期待していいわけではない。泣き言の一つでも言わない事には、足が止まってしまういそうな程心身共に疲れていた。

そのシュウのメガネに唐突に雨粒が落ちた。

「あつ、やべ……」

そう言っている間にも、雨粒はどんどん数を増し、やがてあたりをサーッと濡らし始めた。

「やばいよ……」

シュウに続いてメルも言ったが、その意味は少しばかり違っていた。

「タイヤの痕が流れちゃう。せつかくここまで辿って来たのに」

「どうせ一本道なんだから、どっちだっていいだろ」

シュウが言うと、ケンジが、

「いや、ずっと一本道とは限らんぞ」

「そんなことより……ねえ。あそこに見えるの橋じゃない」

足を引きずるハヤトを庇うように先頭をあるいていたアマネが言う。

目を凝らすと、確かに道の両側に木で組んだ柵のようなものが見える。誰からともなく自然に駆け出し、近くまで来ると、雨音に混じって川の流れの音が聞こえた。

「橋だよ……」

橋の上でシュウは見たままを感慨深く呟きながらあたりを見回した。その土橋はかなり古い物らしく、所々に穴が開いていて、そこ

から土がさらさらと下に流れ落ちていく。両側には膝ぐらいの高さの木が組んであるが、こちらも所々に修復の痕跡がある。

川は鬱蒼とした緑に覆われて三メートルほど下を流れていた。周囲は苔むした岩場のように、いかにも深山の清流と行った気配である。

「ここから下に降りれるかもしれない」

ハヤトが橋を渡ったところで獣道のような痕跡を草むらの中に見つけた。

雑草をかきわけながら進むと、ほどなく下へと続く滑りやすい隘路が現れ、そこを辿って行くと、橋の下の岩場に出た。そこは上から見たよりもずっと広くテラス状になっており、橋の下は格好の休憩所になっている。

そこに五人で肩を寄せあって、しばらく雨宿りをすることにした。雨は益々激しく降りしきり、雷鳴がひっきりなしに轟いている。

「あー、俺達どうなっちゃうんだろ」

「まあ、そう嘆くなよ。とりあえずまだこうして元気なんだから、どうにかなるだろう」

ケンジの返事に、シュウは口を尖らせる

「そうは言っても。ずっとこんな感じだったら、いずれは行き倒れだぜ」

「ま、いい徴候もある。ここに橋があるだろ。しかも現在使われている橋だ」

「この先に村があるってこと？ こいつの話だと、地図にも載っていないような……」

シュウはメルに向かって顎をしゃくってみせた。

「隠れ里かもね……」

水際に生えていた笹の葉をむしって何かを作っていたハヤトがボソリと言う。

「何だい、その隠れ里ってやつは」

シュウが聞きつけて身を乗り出す。

「神仙境って奴だよ。昔から日本にはそういう場所がいっぱいあるのさ。浦島太郎の話、知ってるだろ」

「おいおい、お伽話かよ。勘弁してくれよ」

「いや、お伽話にだって存在理由があるのさ。有るから残ったんじやくて、必要だから有ったというわけだ」

「今度は禅問答かい……」

「そうじゃなくて、まず人に隠したい何かがあったから隠れ里信仰が生まれたというわけ。つまり理由の後付けだ。一説には特殊な宗教団体だったとか平家の落人だったとか、いろんな説があるらしいが、本当の所はわからない。わからないから隠れ里なんだよ」

「つまり、地図にないからって存在しないって決めつけちゃダメ……ってことか？」

「平たく言えば、そういうことになるかな」

「俺達はそのに向っているのかよ。じゃあ、タイやヒラメの舞い踊り……のわきやあねえよなあ」

「ま、そりゃそうだろう。隠れ里は一種のエアスポットみたいなもので、何か特殊なことがなければ行く事はできない。ただし、その予兆を暗示するいろんなアイテムがあるのさ」

「予兆を暗示する？」

「ああ、そうだ。お伽話によく出てくる、米や機織り。それから箸とかお椀なんてえのものもある」

そう言いながらハヤトは木の葉で作った舟を川にむかって投げた。舟は空中でぐるぐると二三回転してから、うまい具合に正位置で川面の端に着水した。そして、そのまましばらくたゆたっていたが、やがて次第に流れの中央に引き寄せられ、大きな石の間を縫って流れる本流にのって下流へと押し出され、やがて反対岸の淀みへと辿り着いた。

そこにはたくさんの枯れ枝がたまっていたが、真ん中あたりに丸い小さな赤い物体が浮きつ沈みつしているのが見えた。

「ウソっ、ホントにお椀だ」

「

シユウは呆氣にとられたように叫んだ。

第2章 奇妙な村 2

一時間ほど休んでいるうちに、雨が次第に小降りになってきた。シユウはもう少し休んでいたそうだったが、日の高い間に少しでも先に進んでおきたいというケンジの提案で最後のビスケットとジュースを皆で分け、出発することにした。

疲労の色は濃かったが、橋の下で見つけた子供用らしい小さな赤いお椀が、一行に新たなモチベーションを与えていた。お椀は上流から流れてきたものに違いなく、今向っているのはまさにその上流のはずだった。

川とは一旦別れるが、また上流のどこかで合流しているに違いはない。

しかし、皆の期待に反して、橋を過ぎた後は行けども行けども単調な道が続いた。

メルは何度もしゃがみ込んで道路を調べる仕種をしていたが、その度に首を横に振りながら立ち上がった。バイクの痕跡は先程の過性の雨のせいで、跡形もなく流されてしまったらしい。

さらに三時間ほど歩いた頃。

天候が回復したせいで、空は日中よりむしろ明るくなっていたが、東の空がほんのり朱に染まり始めた。

「今日も野宿になるのかしら」

アマネがぼそりと言った。神様がそれを哀れに思ったわけではないだろうが、そこから少し歩いたところで、最後尾を歩いていたメルが看板を見つけた。

いつものようにタイヤ痕を探してしゃがんでいる時、ふと横を見ると雑草の間から板切れのようなものが突き出しているのに気付いたのだった。

メルに呼ばれ、駆け足でもどったケンジがそれを草むらから引っ張り出すと、思ったより大きな板で太い一本の杭に打ち付けてあっ

た。かつてこの道端に立てられていたものに違いない。草の中にうち捨てられて大分たっているらしく、四方は腐食してボロボロになっているが、下手糞な文字だけはかるうじて読めた。

これより先 入るべからず

神魂村役場

「入るなっていわれたって、どうすりゃいいんだよ」
シユウが溜め息をつく。

「ま、俺達にや関係ないだろう。……にしてもシンコン村？ って、聞いたことねえな」

ケンジは首を捻ったが、少し歩くうちにみるみる周囲の様子が変わって来た。これまでの原野の雰囲気から一転して、人間の手が加わっている気配がする。周囲の木々は枝振りが整えられ、所々土留めの石積みがあつた。道自体も未舗装ではあるが、今までよりだいぶ整備されている。

「何か、大分人間臭くなってきましたよ。こりゃいよいよタイヤヒラメの舞い踊りですか」

「もし民家があるんなら、急がないとな……日が暮れちまうぜ」
ケンジは早足で歩いた。

ほどなく道が二つにわかれ、その向こうに畑と左前方に大きな針葉樹が林立している一帯が現れる。

その針葉樹を目指して左の道を辿り、近くまで来ると、横道が針葉樹の方角に向かって一直線に伸びているのが見えた。道の両側には杉の巨木が等間隔に並び、その幹には変わった形のしめ縄らしきものが巻き付けられている。その奥には原木を組み合わせたような素朴な鳥居が立っているのが見通せた。

「こりゃ、神社だよ。どうする？」

ハヤトは苔むした大きな石に腰をおろしながら、ケンジに目を向けた。

「まあ、誰もいないだろうな。でも、雨宿りぐらいは出来るかも知れん。ちよつとハヤトに無理をさせすぎたかも知れん。少し休んで行こうぜ」

「えっ、まさか今日はここで泊りなんて……」

シユウが情けない声を出す。

「いや、とりあえずベースキャンプを築こうつてことさ。俺たち二人は少し休んだら先の様子を見に行こう。その間ハヤトたちにはここで休んでもらつて、万一泊めてくれそうな民家が見つかったりしたら、その時はまた迎えにればいい」

一行は、夕焼けで朱に染まつた参道を恐る々々進んだ。

「これつて、しめ縄？」

アマネがハヤトに訊く。幹に回してあるしめ縄には、縄の編み目に黒い丸石が幾つもはめ込んである。

「俺も初めて見たよ……」

鳥居を過ぎると、真ん中だけ雑草が禿げて黒土がむき出しになっている小さな境内が表れ、その奥にキャンプ場のコテージほどの小さな拝殿が見えた。

シユウは逸早くそのそばに行くと、ガラガラと鈴を鳴らし、柏手を打った。

「お賽銭はないけど、どうか今夜は暖かい飯が喰えますように……」

鈴の音は水を打ったように静まり返った境内に驚く程大きな音で響き渡った。驚いたのは一行だけでないらしい。近くの梢から突然巨大なカラスが飛び出して、ガーガー啼きながら茜空に飛び去っていった。

拝殿の中は八畳ほどの広さで、内部は泥棒でも入ったかのように荒れ放題に荒れている。外からそれがわかるのは、拝殿の前面を覆っていたと思われる引き戸の一枚が外され、賽銭箱の横に転がっているからだつた。

「ちよつと失礼しますよ……」

シユウがおどけた格好をしながら横の段を登って、中を覗き込み、

「入っても、別にバチあたんないよね……」

「大丈夫だろう」

長身のハヤトも足を引きずりながら上に登り、ズカズカと中に入っ
ていった。

中ががらんとした正方形の部屋で、奥が供え物を置く場所らしい
壇になっていて真ん中が更に一段と高くなっている他は、これとい
った飾り気のないシンプルな造りだ。だが、床にはしめ縄や木彫を
施された棒やいろんな大きさの箱などが壊され、所狭しと散乱して
いる。しめ縄に編み込んであったものと同じ黒石も方々に転がって
いる。

「泥棒でも入ったみたいだな。……にしても盗る物もなさそうだけ
ど」

シュウはその石ころを一つ拾いあげた。すでに床に散乱している
しめ縄に編み込まれたものもあり、ここでそうしたしめ縄作りも行
われていたらしい。シュウが黙って差し出した石を受取ると、ハヤ
トは重さを確かめるように二三回小さく投げあげてみた。

その時、外から唐突にバタバタと誰かが駆け出す音が聞こえた。

「まてっ」

怒鳴り声がある。シュウとハヤトが拝殿から顔を覗かせると、

「今ね、そこから誰かが覗いてたの」

アマネが周囲の森の一角を指差す

「ケンジは？」

「追いかけていった」

ハヤトは急いで外に出て、ケンジの行方を目で追ったが、すでに
夜の帳に包まれ始めた鎮守の森はその密度を一層深めて、そよとも
動かない。

ケンジはあたかも黒い海原に呑み込まれたかのように、皆の前か
らこつ然と消えてしまった。

第2章 奇妙な村 3

少年だ。

あたりはすでに暗かったが、相手の背丈ぐらいは何とか見える。幹が障害物レースのように林立する森の中を、二人の少年は右に左に器用に体をかわして走り続けた。こういう場所をいつも走り慣れている体の使い方だ。

普通の大人ならあつという間に相手の姿を見失ってしまうに違いない。だが、元野球部のケンジも足にはかなり自信がある。一定距離を保ったまま少年達についていく。

さすがに体力的にきつくなりかけた時、唐突に森が切れ、ただっ広い畑地に出た。

もつとつくにまいたと思っただろう。少年達は一旦スピードを緩めて後ろを振り向き、ケンジが森から飛び出して来たのを見て「ワッ！」と叫んでから、再び畑を対角線に横切る形で走り始めた。

それを見てケンジは敢えて畑の中を通らず、周囲を迂回する道を選んだ。

かなり遠回りになるが、足場の状態が悪い畑とは比べものにならない程走りやすいはずだ。土に足をとられて苦労している少年達にケンジはぐんぐん近付いて行く。少年達は再び「ウワッ！」と叫んで、畑の向こうに続く道を横断して脇道に逃げ込むと、二手にわかれた。

「待てよ　ちょっと訊きたいことがあるだけだ」

ケンジは叫んだが、少年達は後ろも振り返らず必死になって走っている。

仕方なく左の少年に的を絞って、同じように脇道に飛び込んだ。ケンジも意地になっている。たかが少年二人にまんまと逃げられてたまるか、という単純な競争心だけが足を動かしている。

やがて、少年の左右には再び畑が広がり始め、唐突に大きな土蔵

が現れた。少年はその向こう側に回り込んだが、同じように回り込んだケンジから、その姿はすでに見えなくなっていた。

蔵の中に隠れているのかと思ったが、かなり傷んでいて所々土壁が剥がれ落ちているものの、入口は南京錠でがちりと閉ざされている。ケンジは道に沿ってまたしばらく走り続けたが、少年の姿はすでにどこにもなかった。

「糞っ！」

どういうわけだか、無性に腹がたつ。少年にというより、馬鹿みたいにむきになって、こんな遠くまで来てしまった自分に対する憤りだ。

草を蹴飛ばしながら土蔵の所まで戻って来た時、先程はわからなかったが、その土蔵の一画がかなり激しく崩れている事に気付いた。直径一メートルほどの不規則な形をした穴があいていて、中から板で塞いであるらしいが、その板も微妙にずれている。近付いて覗き込むと、少年一人なら充分に通り返けられる隙間が開いているのが見えた。

板を押すと、意外にも簡単に中にずらすことが出来た。

ポツカリと空いた板と外壁の隙間にケンジはためらわず体を滑り込ませた。プンと黴臭さと土臭さが入り混じったような独特の臭気に包まれる。

小さなあかり採りの窓があるだけの暗い土蔵の中は雑多な農業資材が天井近くまで積み上げられている。

真ん中の細い通路を歩いていると、奥の方からカサカサという小さな音が聞こえた。ケンジは足音を偽らせて、ゆっくりその方角に歩み寄る。

土蔵の一番奥には藁が人の高さ程積みあげてあった。

「なあ、ちよつとばかし訊きたいことがあるだけだ。恐くないから、出てこいよ……」

返事はなかったが、藁の山が少しばかりガサガサと動いた。

ケンジは藁の山に手を突っ込んで乱暴にかき分けた。黒いシユー

ズがちらりと見える。すかさず捕まえると、思いきり蹴つて来た。その足首をつかまえてずるずると引きずり出す。

小学生の三年生ぐらいに見える少年は、この寒さの中、茶色の半ズボンに白いＴシャツという軽装である。

ケンジはなんとか少年の機嫌をとり、大人のところに案内してもらう算段だった。

だが、少年の抵抗は信じ難い程激しく、キヤーキヤーと怪鳥のような雄叫びをあげて、滅茶苦茶に暴れまわり、ケンジの腕にもたちまちみみず張れが何本もできる。

「この小僧　乱暴はしないから、静かにしろってんだろ」
力づくで直立させ、顎をつかまえて顔を自分の方を向けせようとする。

少年が暴れた拍子に長く伸ばした前髪が二つに割れた時、ケンジは信じ難いものを見た気がした。それは額の真ん中にある『第三の目』だった。

「あつ」

ケンジは思わず手を離れたが、それと同時に後頭部に鈍い痛みを感じた。

倒れながら初めて背後の人の存在に気付いたが、すでに意識はなくなる寸前だった。

第2章 奇妙な村 4

ケンジがいなくなつて間もなく、遠くのサイレンの音が聞こえたアマネがさかさず腕時計に目をおとす。

「ちょうど五時だわ」

「時報だな。村が近い証拠だ」

ハヤトがそう言い、しばらくしてからシユウウが笑顔になった。

「つーことはさ、今夜どこか泊めてもらえるかもしれないってことじゃん。とにかく、早く出発しようぜ」

「ケンジはどうすんだよ。お前たち先発隊じゃなかったのかよ」

「それは心配しないでいいんじゃない。ケンジのことだからきつとうまくやってるよ」

「いや、ここでバラバラになるのはまずいな」

「一人だけ置いてはいけないわね」

ハヤトの意見にアマネも同調する。メルは皆から少し離れたところをブラブラしていた。

「じゃあ、俺達ここで足留め？」

「何、すぐ帰ってくるさ……ちよつと中で休んでいないか？」

ハヤトは遠くにいるメルにも声をかけたが、

「あたしはいいよ。このへんにいるから」

素っ気なく断られ、所在なげなシユウウも、

「あの、悪いけどさ俺も外にいるよ。見張りも必要だろ……って言うより、正直、こん中気味悪くてさ」

「そうか、じゃあ……」

ハヤトはアマネを連れて、拝殿の中に入った。

壊れている箱の中から比較的まともそうなものを二個選んで、向いあわせに並べる。

箱に座つて目を瞑ると、疲労感が足許からじわじわと昇つて来るのがわかる。長いような短いような変な二日間だったが、とりあえ

ず事態は好い方向に向かっていると云ってよかった。

とりあえず全員五体満足で、ようやく村に辿り着いたのだ。後は連絡さえとれば、誰かが迎えに来て、車の保険などの実務的な話に移行するだろう。

焦ることはない。すでに流れにのっているのだから……。

そんなことを考えていると、アマネがクスクス笑い始めた。

「思い出しちゃった……」

「ん？」

「初デートの時……」

「ああ……」

大学入学当初、ハヤトはアマネとつき合っていた。一時は同棲に近い生活までしていた。

そのアマネとの初デートは甘い雰囲気とはほど遠いひどく滑稽なものだった。当事、大学の周りにはいるんな変わった店があつたが、ハヤトたちが行ったのはホラー喫茶と呼ばれる、怪奇趣味を売り物にしている店だった。

いかにも廃虚といった内装に、店員がそれらしいメイクをして現れるのだが、問題は店内が極端に暗い事だった。ミカン箱のような粗末なテーブルの上の小さなロウソクが唯一の灯りで、食べ物箸でつかむのさえ苦勞するほどだから、立って移動しようとするとな変な事になる。

実際、ハヤトはトイレに行く途中、段差に躓いて派手に転ぶし、アマネも帰り道を間違えて狭い店内で迷子になり、店員に笑われた程だった。

「あの頃は楽しかったよな……」

今、目の前に料理が並べられたあのテーブルとロウソクさえあれば、シチュエーションとしてはほぼ同じだった。

「お子さん、元気？」

アマネが唐突に訊いた。

あれから歳月は流れ、アマネはハヤトの親友の洋太郎とつきあい

始めてやがて結婚し、ハヤトは会社で知り合った同僚と結婚した。結婚したのはアマネの方が早かったが、未だに子どもは授かっていなかった。

「ああ、三歳になったよ」

アマネが子どもの事を聞く時、ハヤトはちよつと気を使ってしまふ。かつてそのことで洋太郎に相談を受けたことがあることは、アマネには内緒にしていた。

「可愛いさかりね……」

「ああ、可愛くないと言つたら、嘘になるけど」

「子どもつてあれよあれよという間にどんどん大きくなつちゃうから。一年一年を大切にしていあげなきゃね。……と言つても、子どものいない私が言つても、説得力ないか……」

アマネはそう言つて、舌を出した。

何故、アマネと別れたのだから。ハヤトは人前では決して口にすることのない忸怩たる思い、アマネにも洋一郎にも妻にも語る事のない思いをぐつと胸の奥に仕舞い込んだ。

「こりゃ。そんなところで何しとるんだ」

その時、唐突に拝殿の中が懐中電灯で照らし出された。外に見知らぬ男達が立っていて、怪訝そうな顔で中を覗き込んでいる。

アマネが眩しさに手で顔を覆いながら。

「すみません。私達自動車事故にあつて、ようやくここまで辿りついたもんですから……」

「おめえら、どこのもんだ？」

「ここで少し休ませてもらおうと……」

警官の制服をしたずんぐりした男が懐中電灯を片手にずかずかと入ってきて、その懐中電灯をアマネの鼻先に突き付ける。

「おめえ、耳悪いのか。どこのもんか訊いとるのに、さつさと答えんかい」

そう言いながら後方に合図を送ると、頭を丸刈りにした私服の若い二人の男が入つて来て、いきなりハヤトの腕を両側から後方に捻

りあげた。

「いててて、何すんだよ」

「こらっ。暴れるとためにならんぞ」

警官が腰のベルトに装着してあった警棒を取り出し、ハヤトを睨みつける。いきなり殴りつけかねない危険な気配にアマネは慌てて注意を惹こうとする。

「あの、私は葛西雨音という者で、本当に交通事故でここまで辿り着いたんです」

「じゃあ、身分証明書見せんかい」

アマネはポケットから財布を取り出し中を調べていたが、

「事故の時、全部なくして今、証明できるものはありません。私達、燃える車の中から脱出したんです」

「なるほど、燃える車から命からがら逃げてきたけど、証拠になるものはすべて灰になっただってわけだ」

「そうです……」

警官は大きな腹をゆすつて、はあはあと笑ってから、いきなりアマネに顔を近づけて恫喝した。

「映画じゃあるまいし　そんな嘘が通用すると思ってるのか。この糞アマ！」

アマネはヒツと叫んで、バネ仕掛けの人形のように立ち上がった。「所長、こいつ抵抗しますよ」

ハヤトが痛さに耐えかねて体をよじろうとすると、背が高い方の若者が言った。

「暴れるようなら、少々痛めつけてもかまわん」

何かおかしい……とハヤトは思った。誰か他の人間と間違えているのか、あるいはこの警官自体がおかしいのか。偽警官という線も考えられなくはないが、制服は本物のように見える。

とりあえず、無抵抗である事を意思表示しないと何をされるかわかったものではなかった。

「ちよ、ちよっと、待ってくれよ。逃げも隠れもしないから、とに

かくこの手を放してくれ」

「放せだと……犯罪者のくせに偉そうに言うな」

警官の目に陰惨な光が浮かぶ。

「わ、わかった、じゃあ手錠をかけてくれ。それなら抵抗のしようがないだろう」

「ほう、自ら手錠をかけるとは、面白い犯罪者だ。お望み通りにしてやれ。ただし、手錠なんてえ高級なもんは使わんでいい。荒縄で充分だ。抜けねえように思いっきり締めあげてやれや」

男達はハヤトの手を後ろ手に縛りあげ、続いてアマネの手も縛った。アマネの顔は緊張でこわばっている。さすがに涙は流していなかったが、未だかつて男にこれだけ手荒に扱われた経験はないに違いない。

「……にしても、ようこんな荒らしたもんだな」

「いや、これは俺達がやったんじゃない」

「じゃあ、誰がやったんだよ。まあいい、署でじつくりと締め上げて、吐かしてやる。どんな激しいプレイをすると、こんな有様になるのかをな……」

警官が下卑た笑いを漏らし、仲間の男達もつられて笑った

ハヤトはここに至って、男達が話題にしているのは自分達二人だけだということに気付いた。シユウとメルは気付かれずにうまく逃げたのだろうか。

それにしてもこの警官たちは何者だろう。

男達は乱暴に二人を境内に引きずりおろすと、いきなり汚物の臭いのする麻袋を頭からすっぽりと被せた。

第2章 奇妙な村 5

袋を被らされているので、周囲の様子は分からなかったが、道は悪いらしく車は上下に激しく揺れた。十分ほど走ったところで車から降ろされ、建物の中に連れ込まれた。

ようやく荒縄を解かれ、袋を外されたのは、小さな窓が一つあるだけの取り調べ室のような殺風景な部屋の中だった。

入口の近くに先程の丸刈りの二人の男が立ち、部屋の真ん中には折り畳み式の長いテーブルが二つ並べて置いてある。そして、その向こうには貧相な部屋に似つかわしくない豪華な安楽椅子があり、そこにニヤニヤ笑いを浮かべた警官が腰を沈めていた。

「俺はこの所長の多々良っちゅうもんだ。さてと、とりあえず持ち物をここに全部出してもらおうか」

椅子にふんぞり返ったまま机の上を叩いた。ハヤトこそごととポケットを探り、スパナと手帳と神社で拾った黒い石、空のビニール袋を、アマネは財布と小さなドライバーと文字盤がピンク色の腕時計を机の上に並べた。

多々良は面倒臭そうに体を起こすと手帳をパラパラとめくったり、財布の中身を調べたりしていたが、やがて中身でも確かめるようにスパナを鉛筆の先でコツコツと叩いた。

「ほう、なかなか渋い物持ってんねえ。脱獄でも企てようって寸法か……」

そう言いながらアマネのそばにやって来て、背後に回るといきなり服の上から体をべたべたとさわり始めた。

「何をするんですか？」

アマネが思わず身をよじって避けようとする、

「ねえちゃん。あんた、自分の立場わかってんの？ あんた、被疑者なんだよ。被疑者を勾留する前の当然の手続きなんだがねえ」

「じゃあ……あの……女性警官の方を……」

多々良がゲラゲラと笑い、それにつられて後ろの男達も笑った。
「残念ながらここは男所帯。野郎しかいねえんだよ」

そう言いながら、容赦なく再びさわり始め、後ろに立っていた背の低い男の方に顎をしゃくってみせる。

男はハヤトに近付き、脇の下から手をまわして体を調べ始めた。
「それにしてもねえちゃん、いい体してるねえ。旦那がうらやましいよ」

自分の掌の臭いを嗅ぎながらゆっくりと安楽椅子まで戻って、机の上に乱暴に足を投げ出す。

「あの、主人と連絡を取りたいんですけど」

アマネが屈辱のあまり青ざめながら言うと、多々良は呆れたようにハヤトの顔を見て、

「主人？ こいつは間男？ ……全く可愛い顔して、あんた、やることやってんじゃねえの。くわえられる物は何でもくわえるってか……」

再びゲラゲラと笑いながら、

「ま、明日取り調べすつから、今日はそこでゆっくりしてな。男女同室だからって変なことすんじゃねえぞ。ちゃんと見張ってつかんな。里村、連れてけ」

里村と呼ばれた背の高い男が、入ってきた方角と別のドアを開け、二人の腕をつかんで乱暴に隣の部屋に誘導する。ドアを閉める寸前、多々良と残ったもう一人の会話がきこえてきた。

「ウサギカメラも呼びますか」

「ああ、一応な……それと、目玉の瓜生にも連絡しといてくれ」

その部屋は先程の部屋よりかなり小さいく、書棚と机がふたつ、書類入れやスツールや石油ストーブなどいろんな物がごちゃごちゃと置いてあった。ドアは今入ってきたものの他に二つあり、そのうちの一つは南京錠で閉ざされ、上の方に開閉できる小さな覗き窓がついていた。

里村は机の引き出しから鍵を取り出すと、そのドアを開き、二人

を乱暴に中に押し込んだ。

ドアを締めた後、ガチャガチャと施錠する音がする。

そこは階段下の倉庫のような天井が斜めになった細長い空間で、片側の全面が棚になっていた。棚には瓶に入った薬品や、ロープや手錠や、古い書類の束や段ボールなどが乱雑に積み上げてある。反対側の壁には小さな壁掛け時計がかけられ、入口近くには申しわけ程度の洗面台もあった。あかりはその洗面台の上に吊るされた裸電球だけである。

「まるで、整理整頓でもしろって言わんばかりだな……」

「ここって本当に警察なの？」

「まあ、そうだと信じたいが……。この部屋はいわゆる留置所なんだろう」

ハヤトは灰色の寒々とした室内を見回した。ドアの小さな覗き窓の他には、奥に高窓があったが、頑丈そうな鉄格子が嵌っている。

ハヤトは部屋の中をぐるぐると歩き回ってから、洗面台で顔を洗った。

「物は考えようだよ……」

「えっ、何が？」

「ここには屋根もあれば、水もある。野宿するよりよほどいいってことさ」

洗面所の横にぶら下げてあった汚いタオルで顔を拭いた。

「それにしても、さっきの人達、何だか変じゃない？」

ハヤトはアマネを部屋の奥に連れて行き、頭を抱えるような振りをしながら耳許で囁いた。

「そういう話はなるべく小声で話そう。」

「聞かれてる？」

「もちろん盗聴されているだろう。まあ、聞かれても困らないことはむしろ聞かせた方がいいぐらいだが、核心部分はなるべく話さない方がいい」

「ここの人達のこととか？」

「本物の警察にしちゃあどう考えても変だし、だからと言って偽者という感じもしない。その辺に転がっている物は、どれも本物らしく見えるしね。けど、留置場がないというのも何だか変だ。結局、そのあたりがはっきりしない間は、あまり相手を刺激しない方がいいと思う」

「むこうに合わせるってことね」

「ああ、むこうはむこうなりにこちらを警戒する事情でもあるのかも知れない。明日になれば、おそらく取り調べがあるから……ま、あの所長の話が本当ならだけ……そこでも余計なことは言わない方がいい」

「誰かに連絡がとれるといいんだけど……」

「それは、当然の行為だけど、そのあたりを強く言うとは逆効果になるかもしれない。とりあえず神社を荒らした犯人じゃないことはきちんと主張した方がいいな。まず、小さな誤解から解いていくのが先決だと思う」

その時、ドアの小窓がカタンと音をたてた。

ハヤトは何ごともしなかつたようにアマネから離れ、ドアの方に近付こうとしたが、

「こつちに来るな！ 窓際に寄つてろ」

怒鳴り声が聞こえ、続いてがちゃがちゃと鍵を外す音が聞こえ、里村が入ってきた。

手には薄汚れた木製のプレートを持ち、その上にはアルマイトの器が二つ並んでいる。

「ほれ、飯だ。何か会ったら教える。このすぐ外にいるかな。それから毛布はその棚の右奥の段ボールに入ってるから、勝手に使えや」

それだけ言うと、ハヤトたちに目を向けたままの姿勢で後ずさりし、緊張した面持ちで外に出ていった。ほどなく再び錠を閉める音がする。

食器の中には生温い餛飩が入っていた。紙のように薄っぺらな蒲

鉾にネギが散らしてあるだけの粗末な餛飩だったが、空腹な二人にとっては何よりのごちそうだった。

「悪くない」

「うん、すごく美味しい」

「確かにひどい状況ではあるけれど、こうしてご飯にもありつけたわけで、当初の目的は一応達成したということだよな」

ハヤトが言うと、アマネは頷きながら餛飩をすすった。

第2章 奇妙な村 6

夜中になると冷え込みは一層厳しくなった。

室内にいるとは言え、四方は冷たいコンクリートである。薄っぺらな毛布だけでしのげるような生易しい寒さではなかった。

二人は背中合わせになって寝ていたが、アマネは先程からハヤトの体から伝わってくる激しい震えを感じていた。

「ねえ、起きてる？」

「ああ、何だか寒くて目が覚めたよ」

「そんなに寒い？」

「ああ……」

アマネは体を起こし、ハヤトの額に手をやった。

「やだ、熱がある……ひどい熱よ」

「そうか……風邪でもひいたかな。咳もクシャミも出ないけど……」
アマネは思い付いたようにいきなりハヤトが掛けている毛布の裾をめくった。

「おいおい、何すんだよ」

「ね、ちよつと足見せてよ」

ハヤトも体を起こし、ズボンの裾をまくって見せた。その裾をまくるという行為さえ困難が伴う程、足は腫れあがっていた。触ると火のように熱い。

アマネは立ち上がると、ドアをガンガン叩き始めた。

「ねえ、おねがい。ちよつと電気つけてくれないかしら」

しばらくしてから小窓が開いて、そこから隣部の灯りが入って来る。

「何だよ、うるせえなあ」

うたた寝でもしていたらしく、まだ寝ぼけているような声だ。

「ねえ、電気つけてくれない。ハヤト君が大変なの」

里村の目許に不快な皺が刻まれたが、少したってから洗面台の上

の裸電球が明るく室内を照らし出した。

先程は暗くてわからなかったが、足はアケビのような紫色に染まり、今にも弾けそうに腫れていた。

「大変」

アマネは足の状態を見るなり、再びドアに飛びついた。

「ねえ、ちよつと病院に連れていってもらえないかしら。足が物凄く腫れてるのよ」

「小窓が開いて、里村が再び顔を覗かせた。

「今度は何だよ。もう気がすんだろ」

「ねえ、病院　ハヤト君を病院に連れていってくれないかしら」

「病院？」

ちらつと中の様子を伺うような素振りを見せたが、

「いやあ、ダメだダメだ。第一こんな時間にやってる病院なんかねえよ」

「じゃあ、せめて氷ないかしら」

「ここには置いてないなあ。家に帰りやあるけどよ」

「ねえ、それ持ってきてもらえない。とにかく早く冷やさないと…」

…

少し考えているようだったが、

「いやあ、やつぱりダメだ。ここを空けちゃいけない規則なんだよ」

「逃げたりなんかしないわ。この状況じゃ逃げられっこないし……」

「そうじゃなくて、規則なんだよ。とにかくダメなものはダメだ」

里村もう一度室内を見回してから、

「電気はつけといてやつから、水でも冷やすんだな」

そう言うと、それ以上の会話を拒否するように小窓をパタンと閉じた。

第2章 奇妙な村 7

メルは黒いヘルメットを小脇に抱え、雌豹のような素早さで滑るように森の中を走り抜け一本の道に出た。そこからは道沿いの木陰に身を隠しながら少しずつ移動する。

人影も車も見当たらなかつたが、さっきのように車のライトを消したままいきなり神社の境内に入って来るような怪しい輩もいる。用心するに越したことはない。

そう思つて木陰から次の木陰に移ろうとした時、唐突に後ろから声をかけられた。

「ちよつと待つてくれよ」
「シューだった。」

メルは乱暴にシューを木陰に引き込んで、しゃがませる。

「何だい、つけてきたのかい？」

「人聞きの悪い言い方するなよ。跡を追ってきたんだよ。つーことは、ま、同じか……」

「あいつらは？」

「ああ、俺が最後に見た時は、懐中電灯をつけて中に突入するところだったよ。何か一人は警察官みたいだったな」

「馬鹿だね。あんなマツポいるもんか。あれはかなりヤバい奴らだよ。あのパト見たる」

「確かにありやあ変だ。それよりお前、どこに向かつてるんだよ」
メルは道の先を指差した。

「あっちの方に村がある。きっとカズ兄もそこにいると思うんだ」
「兄貴に逢えたら、どうするつもりだ」

「そりゃあカズ兄に訊いてみなきゃあわからないよ」
立ち上がって歩き出そうとした途端、後ろの方が急に明るくなつた。

慌てて近くの藪に身を隠す。

ほどなくやってやってきたのは先程神社に突然現れた車だった。紺色のライトバンで横に『栃木県警』という白い文字が書いてある。だが、どう見てもパトカーではないし、犯人護送車にも見えない。文字さえなければどこから見ても商店の車ぐらいにしか見えない。「ハヤトたちはあの中にいるのかな？」

車が通り過ぎ、ライトのあかりが見えなくなつて、しばらくしてからシユウが訊いた。

「だぶんね……」

メルはそう言つて、バンを追うように歩き始めた。

しばらくは単調な道が続いたが、やがて遠くに規則的に並んだあかりが見えてきた。近付くと道沿いに立てられた街灯で、その周囲には田畑が広がっていた。さらにその田畑の中に点在するように木々が固まつて生い茂っている場所があつたが、よく見るとそこからも仄かな光が漏れ出している。

どうやらこの界隈の家々は道から少し離れた場所に、木々に囲まれて数件ずつ固まつて建てられていて、本道からそこに向かつて長い私道を使つて行き来しているらしかった。

「とりあえず、どこかに腰を落ち着けなくちゃ。ハヤトやケンジのことはそれからだ」

シユウはどの家に向かつたらよいものか迷つていた。

テレビで芸能人が唐突に一般家庭を訪ねて泊めてもらうという番組をやつていたが、人は想像以上に不意の来客を嫌うものである。

テレビで顔が知られている芸能人でさえそうなのだから、どの馬の骨とも知れぬ男女がいきなり泊めてくれ、と言つた時の相手の反応は容易に想像がつく。

メルも同じ気持ちなのかゆっくり歩きながら、遠くの家のあかりを物色するように眺めている。

道は村の中心部に向かつているらしく、次第に家の数が増えて来た。そのうち遠くの方から本道へと続く小道を誰かが歩いているのに

気付いた。

「あの人に訊いてみようか？」

シユウが言うと、

「何か変だよ……」

メルは小声で言つて、シユウを横の藪の後ろに引きずり込んだ。

やってきたのはやつれた感じの中年の女性だったが、真つ白な着物に真つ白な帯という異様ないでたちである。しかも頭には白い鉢巻きをしめ、その鉢巻きの真ん中には『目』のような絵が書いてあった。

「何だこいつ」

シユウが呟くとメルが人さし指をたてた。

その女の後から同じ道を少し遅れて男がやってくる。やはり同じような白装束だったが男の方は提灯をぶらさげている。そして、その提灯にも例の『目』が書いてあるのだった。

周囲を見渡すと一人また一人という具合に白装束の人々が私道に現れ、軽く挨拶をかわして、しばし何ごとかを話し合っていたが、そうした集団があつちにもこつちにも現れ、周囲は至る所に白い人がいるような状態になる。そして、何か合図でもあつたかのように一斉にぞろぞろと中央の通りを目指して歩き始めた。

シユウとメルの方に向かって来る一団もいて、二人は藪の中で一層身を縮めて息を殺した。集団同士は道の真ん中でやはり互いに挨拶をしあい、集団同士がさらに大きな集団を形成して、しまいには道の上に伸びた長い巨大な白蛇のようになって、うねりながら前方を目指して歩き始めた。

「ええ、天気にも恵まれましたな……」

「はて、本祭でもこのようになればよいが……」

二人が隠れている藪の横を通り過ぎながら、年寄りらしい男たちの会話が聞こえて来る。

大勢の人間が藪の前を通り過ぎたが、幸いな事にどうやら列の最後尾付近に位置していたらしく、やがて周囲のざわめきや足音は次

第に遠ざかっていった。

完全に物音がしなくなつてから、二人はごそごそと藪の後ろから這い出した。

遠くに提灯の灯りに照らされた仄白い帯状のものがうねうねと蠢いているのが見える。

二人は呆気にとられてしばらくその様子を見ていたが、少したつてから跡をつけはじめた。

集団の先頭は一体どのあたりにいるものか、白蛇はうねうねとのたくりながら先へ先へと続いている。

やがて、周囲に次第に家が増え始め、時折何かの施設かと思われる大きな建物が現れて、村の中心部に近付いことがわかる。そうした建物の二階などから誰か外を見ている者がいるのではないかと、周囲に気を配りながら物陰に身を隠して慎重に移動するが、白蛇の去つた村にはほとんど人の気配はなかった。

やがて、再び民家のあかりが少なくなりかけた頃、先頭が白い線となつて左に曲つているのが見えた。

人々がすべてその道に入り、奥の方に去つて姿が見えなくなるのを待つてからそばに行くと、両側に大きな杉の木が規則的に並んだ真直ぐな道と奥には鳥居が見えた。

「こんな景色、どつかで見た事ない？」

「あるある」

メルの言葉にシユウはニヤリと笑みを浮かべた。

それは先程までいた神社と瓜二つだった。どこかで道を間違えて元の場所に戻つてきてしまったのかとも思ったが、そうでないことはすぐにわかつた。

こちらの神社は周囲に民家が点在しており、そして参道はさきほどの神社より手入れが行き届いて、鳥居も立派だった。

「行つてみるか」

「うん」

シユウの言葉にメルは小さく答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1143c/>

神魂村始末記

2010年10月9日01時00分発行